

令和 2 年 7 月 3 日現在

機関番号：37105

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02483

研究課題名(和文) 日英同盟期の外交と日本文学及び文化に関する基礎研究1880s-1920s

研究課題名(英文) Japanese Culture and International Politics: A Study on British Japanology and Japanese Literature During the Period of The Anglo-Japanese Alliance 1880s-1920s

研究代表者

西村 将洋(Nishimura, Masahiro)

西南学院大学・国際文化学部・教授

研究者番号：70454923

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1880年代から1920年代を対象に、特に日英同盟期に注目しながら、(1) 在英経験を持つ日本人に関するデータ、(2) 日本政府の外交文書、(3) 英国で発行された日本語雑誌、(4) ロンドン日本協会に関する文献、の4点について基礎的な調査を行った。加えて、それらの調査結果に基づいて、イギリスで生み出された日本に関するイメージを、芥川龍之介や夏目漱石がどのように受け止めたのかを考察し、論文にまとめた。また、イギリスで発表された日本近代美術に関する論文を翻訳して公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義として、以下の3点を挙げることができる。(1) 文学、美術史、政治学など複数の学術領域を横断的に考察することで、異なる研究領域に所属する研究者が、相互に意見交換できるような研究成果を提示することができる点。(2) 日英同盟期の資料を発掘することで、国際的な研究に寄与することができる点。(3) 日本近代文学の研究を、美術史や外交史との関係を踏まえて、学際的な視点から更新することができる点。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to examine the materials on Japanese culture during the period of the Anglo-Japanese Alliance and to investigate how the Japanese accepted the image of Japan presented by the British. I researched the following four points of view. (1) Japanese intellectuals who stayed in Britain. (2) Diplomatic documents of the Japanese government. (3) Japanese magazines issued in London. (4) Journals published by the Japan Society of London. I summarized my data and analysis and published a paper on Ryunosuke Akutagawa, a paper on Soseki Natsume, and a translation on modern Japanese art.

研究分野：日本文学

キーワード：ジャポニスム オリエンタリズム 芥川龍之介 夏目漱石 ジョン・H・ディクソン 近代日本美術史

1. 研究開始当初の背景

2010年前後から、1930年代の文化活動と国際政治に関する、重要な研究成果が相次いで発表されている。その動向は、大きく以下の2つに分類できる。

- [I] 個別研究：和田敦彦氏の『越境する書物』(2011)は、太平洋問題調査会や高木八尺らに注目して、1930年代前半のアメリカにおける日本学の実態解明を行うことで、リテラシーや政治性の問題化に成功している。一方、山本亮介氏の論文「'Kokoro(Le pauvre coeur des hommes)」（仏訳『こゝろ』）出版の周辺」(『日本近代文学』2007.5.)では、外務省文化事業部、国際文化振興会、国際ペンクラブの思惑が交錯しながら、夏目漱石『こゝろ』の仏訳版が1939年にフランスで刊行される経緯が詳述されている。
- [II] 資料紹介：和田桂子氏を中心とする共著『満鉄と日仏文化交流誌『フランス・ジャポン』』(2012)や、鈴木貞美氏による共同研究の成果である『『Japan To-day』研究』(2011)によって、海外向け文化宣伝雑誌の*France-Japon* (1934-1940)や*Japan To-day* (1938)の研究が開始されている。

実際に、本研究の研究代表者(西村)も、鈴木貞美氏の共同研究に参加するとともに、拙稿「陰翳礼讃」と国際的ディスコース」(『日本近代文学』2015.5.)などの個人研究を通じて、国際政治と文学者や文化活動の関連性に関心を持ち、調査と分析を継続してきた。

2. 研究の目的

上記のように、国際政治と文化活動に関する研究が高まりを見せるなかで、研究代表者は、より長期的な時間の流れのなかで、なおかつ、より広範囲の地域の動向を視野に収めながら全体を考察すると、どんな理論的な枠組みが現れるのか、という問題に関心を持つようになった。

そこで本研究が注目したのは、明治期から大正期の日英同盟期における、国際政治と文化活動の関連性である。具体的には、以下の4点に注目した。

- [1] 滞英経験を持つ文学者らの言表
- [2] 日本政府の外交文書
- [3] 英国で発行された日本語資料
- [4] ロンドン日本協会に関する資料

これらの文献調査に基づいて、多角的かつ横断的に文化活動と国際政治の関連性を考察すること、それが本研究の目的である。より具体的には、日英両国を中心とするヒトやモノの移動を解明することで、文化と政治が織りなす諸問題の分析を試みた。

3. 研究の方法

上記「2. 研究の目的」で示した4項目について、次のような研究手法を用いた。

- [1] 滞英経験を持つ文学者らの言説：本研究の対象期間を、以下の3期に分けた。条約改正交渉期/1880-90年代。日英同盟成立期/1900年代。第1次大戦前後/1910-20年代。その上で、各時期に渡英した日本人の中から主要人物を選出して、文献調査と考察を行った。主要人物の選出にあたっては、研究代表者が発表した共著『言語都市・ロンドン』(2009)のデータを基礎資料として活用した。
- [2] 日本政府の外交文書：外務省外交史料館、国立国会図書館、宮内庁書陵部などで日英外交と文化活動に関する調査を行った。
- [3] 英国で発行された日本語資料：国立国会図書館などを利用して、日本国内での調査を行い、英国のThe British Libraryでさらに実質的な文献調査を実施した。
- [4] ロンドン日本協会に関する資料：日本国内で可能な限り文献調査を行った上で、英国のThe British Libraryでさらに詳細な文献調査を実施した。

注意点としては、収集した資料を分析する際に、日英関係の枠組み「のみ」に自閉しないように心掛けた。具体的には、上記の4項目について収集したデータを考察する際に、そのデータが、英国「以外」の地域の動向や、上記の4項目には登場「しない」人物の言動と、どのように結びつくのか、という点に注目した。国際的な言説を考察する際には、一部の地域だけに視野を固定して分析を行うと、本質的な問題点を見落とす可能性が高くなるからである。英国「以外」のデータについては、研究代表者が今までに発表した以下4件の文献のデータを主に活用した。共著『言語都市・ベルリン』(2006)、編著『パリへの憧憬と回想『あみ・ど・ぱり』』(2009)、編著『朝鮮半島のモダニズム』(2012)、共著『上海の日本人社会とメディア』(2014)。

加えて、英国のThe British Libraryで調査を行う際に、本研究に関連するロンドン市内のスポット(日本関係の出版社や、ロンドン日本協会の関係者、渡英した日本人の滞在場所など)についての、現地フィールドワークを行った。文献資料のみならず、具体的な歴史的研究として本研究を進めていくためである。

4. 研究成果

本研究の成果は、以下の3点に分けられる。

- (1) 芥川龍之介とジャポニスムの政治的問題

上記「3. 研究の方法」で述べたように、本研究で収集したデータを、日英関係「以外」のデータと関連づけていく過程で、芥川龍之介の重要性が明らかになった。芥川には滞英経験は

ないが、東京帝国大学の英吉利文学科で学んだ芥川のもとには、イギリスのみならず世界各地の同時代文献が豊富に集まっていた。しかも芥川は、それらの海外の情報を踏まえて、重要な問題提起を行っていたからである。具体的には、芥川が1915年に記した草稿に注目し、イギリス、フランス、アメリカなどで発生したジャポニスム（欧米における日本趣味）を、芥川がどう論じたのかを考察した。通例ジャポニスムは美術史の枠組みで語られるが、芥川の場合には、移民問題などの政治的な次元と複雑に関与しており、しかも欧米発のジャポニスムと、それを受容した日本人の双方に対して、芥川は本質的な批判を展開していた。

以上の点について、査読付き学会誌への論文投稿を行い、拙稿「失われたテキストを求めて 芥川龍之介とグローバル・ジャポニスム」(『日本文学』日本文学協会 2018.12.)を発表した。

(2) ロンドン日本協会における近代日本美術とオリエンタリズムの問題

ロンドン日本協会(1891年創設)について、同協会の機関誌 *Transactions and Proceedings of The Japan Society, London*(1893-1941)に掲載された、日本美術や日本文学に関する文献の調査を行った。その過程で、ジョン・H・ディクソン(John Henry Dixon 1838-1926)の特異性が明らかになった。来日経験を持つディクソンは、日英同盟締結直後にロンドン日本協会で研究発表を行っている。その講演原稿でディクソンは、総勢50名近くの日本人洋画家に言及するとともに、複数の日本の知人や日本の洋画について、興味深い発言を行っている。しかも、発表終了後のディスカッションの部分には、ロンドン日本協会の主要メンバーとディクソンとの激しい論戦が記録されていた。特に画家のG・C・ハイテ(George Charles Haité 1855-1924)による発言は、1891年の国際オリエンタリスト会議(International Congress of Orientalists)における政治的な問題とも関与することから、重要な史料になるのではないかと判断した。

そこで、ディクソンの研究発表と発表後のディスカッションを翻訳するとともに、関連事項についても可能な限り詳細な注釈を加えて、拙訳「ジョン・H・ディクソン「現代日本の美術家たちについて」一九〇二年、ロンドン日本協会での発表論文(翻訳と注釈)」(『西南学院大学国際文化論集』2020.3.)として発表した。

(3) 夏目漱石とジョン・H・ディクソンに関する美術史的問題

上記(2)の研究結果で述べたディクソンは、ロンドン滞在中の夏目金之助(漱石)が留学最後の時期に交流した人物でもあった。ディクソンに関しては、稲垣瑞穂『夏目漱石ロンドン紀行』(2004)などの先行研究が存在するものの、ディクソンの来日時期などの基本的事項についてはまだ不明の点も残っていた。そこで、スコットランドの地方新聞を調査したところ、来日中のディクソンによる書簡が掲載されていたことが分かった。その記事を新出資料として翻訳するとともに、美術という観点から漱石とディクソンの関係性を考察した。

この点に関する研究成果は、拙稿「日本とスコットランドへの旅 ジョン・H・ディクソンと夏目金之助をめぐる」(『西南学院大学国際文化論集』2020.3.)として公表した。

※

全体を総括すると、当初の研究目的として設定した、国際政治と文化活動との関連性については、上記(1)の芥川とジャポニスムの問題や、(2)のディクソンとハイテに関する資料紹介によって最低限の成果を残すことができた、と考えている。

また、上記(2)及び(3)では、ディクソン、日本人洋画家、夏目金之助に関する人的なネットワークについて歴史的な状況を明らかにし、(1)の芥川龍之介に関する拙稿では、書物(モノ)の流通が生み出した、ジャポニスムの政治的ネットワークについて問題提起を行うことができた。このようにヒトやモノに関する移動を実証的に掘り起こすことで、新たな学術的視点を提示することができたのではないかと考えている。

他方で、本研究の課題としては、資料調査を進めていくなかで、当初の予想よりも多くの関連資料が存在することが判明し、十分な調査や考察ができなかった点が挙げられる。今後、より長期的な視野で、新たな研究計画の立案を進めていくつもりである。

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 西村将洋	4. 巻 67巻12号
2. 論文標題 失われたテキストを求めて 芥川龍之介とグローバル・ジャボニスム	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『日本文学』日本文学協会	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.20620/nihonbungaku.67.12_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西村将洋	4. 巻 34巻2号
2. 論文標題 日本とスコットランドへの旅 ジョン・H・ディクソンと夏目金之助をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 西南学院大学国際文化論集	6. 最初と最後の頁 469-488
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西村将洋	4. 巻 34巻2号
2. 論文標題 ジョン・H・ディクソン「現代日本の美術家たちについて」 一九〇二年、ロンドン日本協会での発表論文（翻訳と注釈）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 西南学院大学国際文化論集	6. 最初と最後の頁 489-531
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----